フェミニズム批評と『北と南』

金　丸　千　雪

女性運動が発展したきた1960年の末頃から、文学研究の中にフェミニズム批評形式が入ってきている。文学における性(gender)の問題に対して、人々がより敏感になっている証拠であろう。時代の変換の様相を色濃く見せ始めた1980年代から、構造主義、記号論、デコンストラクション、現象学といった新しい文学批評が、活発な論議を呼んでいる。このような状況下で、フェミニズム批評は文学研究の前提を、大きく変化させるだけの力を持ちうるかどうかはまだはっきりしていない。事実、疑問の部分が多い。第一に、文学は性別を遥かに越えた普遍的な真、善、美を表現すると考えられてきたが、この原則をフェミニズム批評は否定している。テキストにはgenderが存在すると言う。性と性的差異の問題が、文学の分析にとって基本的な枠組みとなる。そして、その理論の裏付けをソシュールの言語学上の発見まで立ち返る構造主義、フロイト、ラカン説に忠実な精神分析、さらにマルクス主義に求める。しかし、理論は体系という閉じた組織を持つ以上、広い作品世界全体を覆い尽くすことはできないであろう。また、理論よりも身体に、文化よりも自然に価値を見い出すという女性原理を高く評価するフェミニストが、究極的には論点を権威者からの引用や文学理論に訴えていっているのではないだろうか。

だが、ギャスケル夫人の文学を愛好する者にとって、フェミニズム批評はとても重要なのである。というのも、この批評形式によって、ギャスケル夫人の作品の読み方に変化が起こってきているからである。かつて、Ellen Moersは女性文学史の本を出版するにあたって、次のように言っている。「女性運動は、物故作家を呼びもどし、新しい作家を誕生させ、名の通った作家を変えて、古くさくなった作家を再び文学に呼びよせた。」[1)]Moersは家父長制社会の中で、不当にも無視されたきた「偉大な作家」を我々はもっと引き上げて

いかねばならないと力説している。このような流れの延長として、1987年にPatsy Stonemanはギャスケル研究書を出版する。この本の主眼は、従来のギャスケル批評を修正することにある。その理解を女性文学史について理論的著作という仕事をしたElaine Showalterの言葉によって、求めている。「フェミニストの文学批評は、私達に見解のラジカルな変更と、これまで空白とされていたものに意味をみい出すという要求をしている。」[2]これがStonemanの批評の出発点であったととみてよい。従って、「エリザベス・ギャスケルは無意識ばかりでなく、意識的に性(gender)の問題に気がついていて、女が世の中に向かって話すという重大さを知っていた。」[3]という大胆な指摘が生まれている。この意見は、世に知られている1934年のCecilのものとはかなり異なる。ギャスケル夫人の女性らしい特質を優れたものとして、「やさしくて、家庭的で、如才なく、知的でなく、涙もろくショックを受けやすい女性」[4]というイメージを崩壊させている。事実、ヴィクトリア社会にすんなりと受け入れられている家庭的な、そして忠実な妻と母であるという夫人像に、私達は慣れ親しみすぎたのかもしれない。

そこで、「19世紀イギリスの家庭小説」とか、「ラブ・ロマンス」とも言われている『北と南』を再度、検討してみたい。この作品は、中産階級のソーントンとマーガレットの対立から和解、恋愛から結婚までの過程を描いている。作者の中庸精神を示しているかのように思われる。しかし、社会通念としての「家庭」像、女の役割を客観的に見詰め直している問題小説として読めば、作者の属する社会システムの批判を見事にやっていることに気づかされる。ギャスケル夫人は、階級制度に伴う既成の因襲と社会的不平等のおとなしい受容を暗黙に是認することができなかったのではないだろうか。

この作品の第一章は、ロンドンにあるショウ家の優雅な生活の描写である。応接間のソファーで、ブルーのリボンをして白い洋服を着ている愛らしいエディスは気持ちよさそうに眠っている。その家の応接間は、女性達を外敵から安全に守っている。静かで落ち着いた私的な密室である。そのドアは、無垢なるものを脅かす事柄をすべて閉め出しているかのようだ。そこで幸せを約束してくれる結婚を心待ちにしているエディスは、当時の女性の理想像と想定される。彼女は召し使いを持つ身分となるので家事からは解放され、夫の地位を示す社交上の仕事に専念すればよい、彼女はまさに夫に保護された位置で、「家庭の天使」になろうとしている。注意すべきことは、十九世紀英国社会における女性の領域である。この時代ほど、男は外で働いて女は家庭を守るといった男女の役割が明確化されている時はない。Houghtonはこの時

代の性格をうまく説明しているので、要約してみよう。封建的秩序が産業社会に取って代わる。新時代を象徴する産業革命によって、かつて歴史上存在しなかったほどの厳しい競争社会が生まれている。この変化し発展していく中で、男達は拝金主義となり、非人間的な経済市場で弱肉強食の原理で働かねばならない。苛酷とも言うべき運命を背負わされた男達が、慰めと平安を求めることができる唯一の場所が家庭である。当然、神聖であり喜びに満ちた家庭の中心となる主婦は、「天使」なのである。低賃金労働者である労働者階級の女性達は別として、女性が働くこと自体、卑しいのであって、パーフェクト・レディーとは家庭の有閑婦人と規定されている。[5]ここで考えてみたいのは、ギャスケルの中産階級へ対する姿勢である。政治や社会性活の嵐から避難して、快適な家庭の暮らしと体面に安住しているジェントルマンとジェントルウーマンに対して、とりわけ彼らの天真爛漫な態度に、作者はある種の反感を持っている。エディスは'the Sleeping Beauty'に譬えられているが、そこには安っぽいイメージしか読者に浮かんでこない。ヒーローとの結婚をひたすら待ち望んでいる甘美な受身の女性を私達は発見するからである。エディスは、'too careless and idle to have a strong will of her own'[6]（自分自身の強い意志を持つには、あまりに不注意で怠惰である。）と、言及されている。彼女は女としての従順さは持っているが、個人としての価値を社会に認識させることはできない。ショウ夫人についても同様である。女はか弱き者であり、飾りものであるので、世の中の重大事にいっさい触れさせてはならないという価値観をそのまま受け入れている。彼女はエディスとマーガレットがハーリー通りを越えたり、ほんの近くのところへ出かける時にも、お伴の者を連れていかなければいけないと主張する。(P.109) 当時は、女が一歩外に出ると男の性欲の対象となるというのが一般的である。女性は男性にとって、何でも与えてくれる母親であり、徹底的に受け身でいてくれる花嫁であるべきなのだ。

では、淑女達は純粋な心の持ち主だったのだろうか。ギャスケルは次のように述べる、'the ladies, for the most part, were silent, employing themselves in taking notes of the dinner and criticizing each other's dresses.' (P.215) (淑女達はほとんど、正餐のメモをとったり、お互いの洋服の批評をしたりして黙っていた。)『北と南』は、さりげなく中産階級の女性達の冷酷さ、自分達の生活のみが関心事である身勝手さを告発している。ショウ夫人は召使いの不平には耳を傾けない。骨のおれる家事労働に長時間従事し、衰えゆく視力に悩まされている使用人に、彼女は援助の手は差し伸べな

い。下に引用する召使いの語りには、ヴィクトリア時代中期に使い捨てられていく女子労働者の物語が含まれている。

'... My eyes are not so good as they were, and the light here is so bad that I can't see to mend laces except just at the window, where there's always a shocking draught-enough to give one one's death of cold.' (P.39)

(「・・・私の目は前ほどよくありません。ここの照明はとても暗いので、レースを修繕するのには窓辺以外では目が見えないのです。でも、そこはいつも驚くほどすきま風が吹いて凍え死にそうになるぐらいです。」)

献身的な人生にはつきものの不快、疲労、孤独から解放されている人間は弱者には興味を示さない。『北と南』では、エディスがマーガレットを理解する場面は一つもない。二人の女性をとり巻く環境は、あまりに対照的である。作者は女主人公マーガレットを中産階級に属させていても、彼女の将来に暗い影を落としている。物語の前半において、彼女は悲劇的ですらある。自らの良心に正直でありたいと願い、期待と現実との落差を埋められないまま、聖職の地位を捨ててしまう父親を彼女は精神的に支えていかなければならない。弱者を守ろうとして不法行為に触れてしまい、正式な社会機構の外へ追放されてしまった兄フレドリックの事件に、彼女の心は傷ついている。頼りにしていたい母親の肉体はあまりに弱い。日常生活の中でキリスト教の敬虔さと厳しい倫理を実践しようとすれば、途方もない厄介事に巻きこまれることを彼女は認識している。

では何故、マーガレットはレノックスとの結婚の縁組を拒否したのだろうか。財力、社会的階級といった社会の実像から見れば、マーガレットは感謝して受け入れるはずである。レノックスの誇る'real law business' (P. 41)(本物の法律の仕事) に夫が従事することは、妻にとって上品な生活上の地位を得ることに他ならない。しかし、マーガレットはレノックスを友達としか考えていないと述べる。(P. 62)それは必ずしも女ひとりで自立したいという彼女の意志を意味しない。権力を好む男性とは違った立場から、彼女はレノックスの意識の底にある自己満足や階級意識、俗物根性を見抜いているのである。結婚という文学の主題が、よりアウトサイダーとしての女性の立場から考えられている。従って、彼女がミルトンという産業都市 (マンチェスターを象徴している) に移り、その町を一人で散策して町の労働者の一人と知り合い

になるといった筋書きに、既成のモラルに反逆する女性像が発見できる。家の中にいるべき中産階級の未婚女性がお金を得る場所である工業地帯を、一人で歩くといった行為によって自分自身の確信と洞察を頼みとして生きようとする女主人公の姿を表している。

と同時に、作者は愛と哀れみを持ったマーガレットの視点で、性と階級によって二重の差別を強いられている者の生活実情を提示する。マーガレットはベシィとの対話で、新しく起こった産業社会に存在する影の部分を認識する。衛生設備が貧弱である紡績工場で働いていたベシィは、職場での綿毛によって肺を冒され、やがて死ぬ運命にある。産業資本主義の時代は、工場、鉱山、製造所においての矮小化された子供や婦人労働の搾取とともに始まったという問題が、真正面から取り組まれている。実際、当時の労働条件は驚くほど劣悪である。例えば、1833年に最初の工場法が成立しているが、その内容は形式だけである。「13歳未満の子供の一日の労働が9時間を越えてはならないこと、そして18歳未満の者のそれが、12時間を越えてはならないことが規定された。と同時に、一日に1時間半の食事の時間が与えられ、また13歳以下の子供たちは、一日に少なくとも2時間の授業が受けられることになった。」[7]子供に十分な教育を受けさせなければならないという基本的事柄も、労働者階級は除外されている。そして、食べ物を買うお金がなく空腹で泣いている子供達をかかえる母親は困窮している。八人の幼児を持つ病弱なバウチャー夫人は、ランカシャー方言でマーガレットに訴える。

> 'He's always mithering me for "daddy" and "butty"; and I ha' no butties to give him, and daddy's away, and forgotten us a', I think. He's his father's darling, he is' said she. with a sudden turn of mood, and, dragging the child up to her knee, she began kissing it fondly. (P. 370)
>
> (「彼はいつも私を『パパ』と『パン』で悩ませてばかりいます。私は彼に与えるものは何も持っていないのです。お父さんは出ていって私達を忘れてしまったのです。彼はこの子の父親なんですよ。」と言った。気分を突然に変えて、子供を彼女のひざまで引っ張ってきて、愛情深くキスし始めた。)

"butty"とは非標準英語であり、「bread and butter」を意味する。労働者階級のなまりをそのまま再現することは、その場の雰囲気の緊張と高まりを盛り上げているばかりでない。理不尽な生命の破壊への母親の怒りがある。パ

ンのかせぎ手が突然いなくなってしまう恐怖と、空腹で泣きやまない赤ん坊に何もしてやれない無力さがある。何世紀ものあいだ、家庭生活や個人対個人の交わりに重きを置いた女性の話の中に、政治や経済といった男性の話題はほとんどないだろう。しかし、競争の力よりも協力の価値を知っているマーガレットが、「神は私たちがお互いに、頼り合うように私たちを作ったのです。」(P.169)と工場主ソートンに説く時、そこには社会への重大な警告が隠されている。マーガレットは、時代の脚光を浴びている産業ブルジョアジーが重宝がってい個人主義とは利己主義だと、気づいているのである。彼女はソーントンの独立独歩の精神を理解する一方、彼の「忙しすぎてパンを求めて餓え死ぬ人たちのことを考えられなかった、と笑う。」(P.125)という中に、冷淡で孤独な個人を見ている。乞食のようになって疲れ果てた人々を厄介者としかみなさない彼は、精力的な活動はしても、優しい気持ちはあるのだろうかとマーガレットは思う。

その意味で、第10章のソーントンの語りは重要である。彼の言う財産私有の原則は、彼の生い立ちを省みる時、かなりの説得力を持っている。彼は、早くから父を失い、貧困の中で刻苦勉励をして工場主とまでなっている。'It is one of the great beauties of our system, that a working man may raise himself into the power and position of a master by his own exertions and behaviour ; ...' (P. 125)(労働者が自分自身の努力と行動によって雇主の力と地位まで出世するというのは、我々の持つシステムの大きな美点の一つだ。)は、ソーントンの生きる姿勢そのものである。彼は切り詰めた生活から質素倹約の精神を学び、自らを鍛えていったのである。

蒸気機関車と機械を勤勉な者たちが発明したおかげで、国内の生産力は高まり輸出入は拡大されている。資本家としての自信と誇りを持つソーントンは、断定的な口調である。'We, the owners of capital, have a right to choose what we will do with it." (P. 164) (我々、資本家は、自分達で処理することを選ぶ権利がある。) これは、ストライキが起こった時に資本家の実情を労働者達に説明した方がよいというマーガレットの助言に対する彼の答えである。マーガレットはその意見を言った後に、次のようなつけ加えをしている。'... However, I know so little about strikes, and rate of wages, and capital, and labour, that I had better not talk to a political economist like you.' (P. 165)(「・・・私はストや賃金額、資本や労働についてほとんど知らないので、あなたのような政治経済学者に話かけない方がよいのでしょうが。」)マーガレットは尊敬の念で、ソーントンを政治経済学者とみたのではない。一種

の当てこすりと言える。彼女は雇い主と雇用人という関係を単なる'cash nexus'（金銭でのつながり）としか考えていないソーントンとは異なる交わりを、労働者達としている。彼女は人間愛を持って、彼らと接している。それ故に彼女は、極度に疲労した人間に「勤勉であれ」という道徳を説き、弱者を突き放すような知的抽象的事柄を述べても何も解決しないことを見抜いている。当時のマンチェスターを観察して心を痛めたエンゲルスは、婦人労働者が子供達をおとなしくさせるために、麻酔薬を使用していたと報告している。[8]この事実から、満足に食事ができない労働者が気力がなくなると、その苦痛を一時的にでも和らげるためアヘンを吸っていた推察できる。『北と南』は、はね上がり的行動を許さず、組合の指令に違反した仲間を他殺、あるいは自殺に追い込むという暗い事件を取りあげている。絶えず病気と失業の危険に晒されている者たちと、汚濁と暴力、そして様々な犯罪行為とが結びつくのは常である。

では、この小説に提示されている社会の暗黒面で、何を問題として指摘しなければならないのか。ギャスケルは女主人公を通して、単純な博愛主義を展開しているのではない。模範的な女性であるマーガレットでさえも、彼女の中に因習的な感情や価値観という敵がいることを、物語の前半でギャスケルは明らかにしている。彼女は工場で働く階級の人々は粗野であり、商売人は礼儀作法を知らず趣味を解せないと思っていたのである。だが、ミルトンの人々やソーントンと交わるうちにそれは偏見であると気づき、彼女は成長していく。それぞれの登場人物が矛盾に満ちた「個人」として描き出されている。つまり、ソーントンは資本家であり、ヒギンズは労働者であるといったその階級を代表するような人物ではなくて、皆一様に悩み苦しむ人間なのである。そこには、善良な貧乏人と傲慢な金持ち、あるいはその反対に怠惰な貧乏人と勤勉な金持ちといった図式はない。小説に登場する労働者は無表情でもなければ、「劣っている」という安易なレッテルをも貼られていない。血のかよった人間なのである。その証拠に、夫の死を知らされて「彼はこの子の父親でした。」と何度も何度もくり返すバウチャー夫人の中に、無教養だというイメージよりもむしろ、情のある母親のイメージが与えられている。公の場所においては全く取るに足らない無力な労働者であっても、私的な家庭という場では、未来のある子供達を育て大きな影響力を持つ父親なのだという主張が覆い隠されているからだ。そして、'Poor folk can love their childer as well as well as rich.' (P. 370)（「金持ちと同じように、貧乏人も子供達を愛することができる。」）という生まれ育った所のなまりを使った叫びは、人

間の尊厳を認めないことを心の奥底で辛く感じてきた女性の声である。

労使の対立から和解へとストーリーが展開していった後に、ギャスケルは明確な答えを出している。'We have all of us one human heart.' (P.511)(私たちは皆、一つの人間の心を持っている。) である。それは、ストライキの時に暴徒となって石を投げつける労働者達を目の前にして、マーガレットがソーントンへ勇敢に言ったことと一致する。'Speak to your workmen as if they were human beings.' (P. 232) (「あなたの雇用人達に、彼らは人間であるかの如くに話しなさい。」) 物語の結末近くになって、ソーントンは他人の痛みを自分のものとできる想像力と柔軟な心を持ってくる。マーガレットの影響、そしてソーントン自身が破産してしまったという厳しい現実を体験して、彼は労働者ヒギンズの中に親しみの感情を見いだす。彼が人間同志の個人的な交わりに重きを置いた時、彼の内部に変化が起きる。彼は実際的基盤に基づいた考えができるようになっている。彼は労働者の家庭を訪れてその実体を見る。彼は彼らの一日のうちで一番のごちそうが、油でぎとぎとした黒こげになった肉のかけらであることを知る。そして、彼は工場の敷地内に、労働者たち専用の安く食べられる食堂を建てようと思いつく。(P.444)ここで注目しなければならないのは、個人の心情のなかに起こる行動が、労働者の福利厚生という社会的行動となっている。心情の変化が現行の政治的・経済的取り決めの具体的な変革ともなりうる可能性を示している。ソーントンの視点を政府や法廷や工場にではなく台所に向けさせたところに、家庭生活の既定の生活パターンを信頼したエリザベス・ギャスケルの姿があるだろう。だが、彼女は社会悪と闘うといった広い意味の人類愛を持たない家庭を認めていない。つまり、『北と南』は、きわめて伝統的な要素であるキリスト教、母性、家族といったものにしっかり根を下ろしていても、革新的潜在力を秘めていると言わねばならない。それは、結末がハッピーエンディングであるかのようにみえて、実はもっと複雑な要素を含んでいる点からも言える。マーガレットは'the Sleeping Beaty'のように白馬にまたがった王子様に迎えられ結婚するのではなく、ソーントンの事業の協力者であり、一個の人格とみなされていく。"That man!", "That woman!" (P,530)という対等な男女関係であり、二人は人格と人格とが交わり合う友情に似た形で結ばれている。政治的、社会的平等観が強く打ち出されている。今日、我々は等しく選挙権を与えられているが、1839年、42年、48年、と、労働者階級が選挙権獲得に向かって大請願をしてもその目的を達成できなかった歴史をみると、大変、革新的なことである。

男と女という性差は、私たちの文化を支えるあらゆるものの根底にエネルギーとして潜んでいる。政治、経済、社会、教育や芸術といった至る所で、当然であると思われていることが、何故そうであるのかを見直して修正しようというのが、フェミニズム批評の目的である。その前提として、男性作家による文学作品は主として男性から見た人生を反映していて、それが必ずしも女性の経験と一致しない点が挙げられる。今まで見てきたように、『北と南』は家父長制、組織的な男性の権力、そして女性の全生活領域における資本主義のあいだの相互関係を示している。その中で、社会変革のための行動が男性ばかりでなく女性にもできる、いや、しなければならないと、マーガレットを通して証明されている。個人的な問題は普遍的課題へと昇華している。

人類が種々の発明発見によって自然を征服し、生産費を低くし物質的生活を豊富ならしめた時代が到来した時に、『北と南』は創り出された。この時代に生きて「ギャスケル個人として」取った選択は何であったのだろうか。専制と侵略を好む男性に、生命の創造と保存を大事にする女性原理を理解させようとしたのかもしれない。『北と南』を人間の歴史における男性の役割を構想し直している作品として読むと、いかに私たちが偏屈であり偏狭であるかを思い知らされるのである。

註

(1) Ellen Moers, *Literary Women* (London: The Women's Press , 1976), P.XV.

(2) Patsy Stoneman, *Elizabeth Gaskell* (Sussex: The Harvester Press, 1987), p.1.

(3) *Ibid.*, p.19.

(4) David Cecil, *Victorian Novelists* (London : Constable, 1934), P. 198.

(5) Walter E. Houghton, *The Victorian Frame of Mind 1830-1870* (New Haven : Yale Univ. Press, 1957), PP. 341.-393.

(6) Elizabeth Gaskell, *North and South* (Haromondsworth : Penguin, 1970), P.36.

以下テキストからの引用はすべて本文に頁数を記す。なお、訳文はすべて拙訳

(7) J・P・ブラウン著,松村昌家訳,『十九世紀イギリスの小説と社会事情』(東京:英宝社、1987年),P.144.

(8) エンゲルス著 全集刊行委員会訳『イギリスにおける労働者階級の状態』

II(大月書店,1971),P.20.